

平成28年度岡山ESD推進協議会  
岡山ESDプロジェクト活動支援助成金事業報告書

事業名 いのちの大切さプロジェクト

団体名 特定非営利活動法人 国際協力研究所・岡山 (NPO 1001) 担当者名 竹島 潤

※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

★防災学習ワークショップ(2016年5月13日)於 旭東中体育館 第3学年約320名。



岡山市危機管理室より講師をお招きし、熊本地震の現実、岡山市の震災支援などについて、写真やご講演を通して知るとともに、災害対応ゲーム「クロスロード」を体験して、防災への意識を高めるとともに、多様な考え方があることを学んだ。生徒は赤・青のカードを各1枚ずつ用いた意思表示の機会をいかして、自分の考えや根拠をもつことを意識できた。講演後は質疑応答やワークシートを活用してふりかえりをした。

★吉澤正巳さん(希望の牧場・ふくしま)講演会(2016年6月10日)

於 旭東中体育館 第3学年約320名および教職員・一般市民20名。

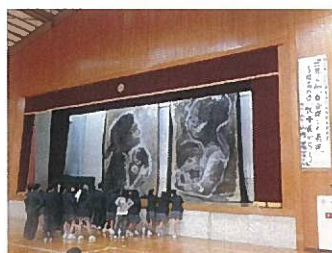


福島県双葉郡浪江町にある「希望の牧場・ふくしま」より吉澤正巳代表をお招きして『考え、行動する生き方をしよう～福島県双葉郡浪江町から～「決死救命・団結、そして未来へ！」』と題しておこなった。以下、生徒の感想より一部抜粋；

- ・東日本大震災の被害の大きさ、写真や話を聞くとやはりすごい大きな被害にあったんだと思いました。吉澤さんが地震の後、港に行った時150隻あった船もなく瓦礫の山だったと聞いて、地震の大きさや津波の強さが分かりました…。
- ・津波のことや住宅のことはよくテレビでやっているのを見ていました。でも、飼っている牛、豚、鶏などのことは全然知らなかったの、今日初めて知りました。私が知らなかった苦労がたくさんあったことを知りました。初めのうちは、もともと殺す予定だった牛などをどうして自分が被曝するかもしれないリスクをかかえてながら守るのかという疑問を抱いていました。でも、「牛を殺すのは証拠をなくすこと」「他の人から牛を守ってくれと頼まれた」などと聞いているうちに、少しだけ理由が分かった気がしました…。
- ・“誰も間違っていない”“正しい”とたくさん強調していて、一番心に残った。生きていく中で、判断しなくてはいけなかったり、どちらかを選択しなければならない状況は多いと思う。ましてや、津波は「命」をかけた判断で、正解なんてわからないから、だから責めることができないんだと分かった…。

★芸術鑑賞と対話型講演会(2016年11月11日)

於 旭東中体育館 第3学年約320名および教職員・一般市民20名。



神奈川県藤沢市より画家の山内若菜さんをお招きし、芸術鑑賞講演会および対話型講演会を開催した。演題は「世界と私、自分探しと表現～福島の母、牧場展から～」。また、鑑賞作品は「牧場」(15m×2.6m)「福島の母」(5m×3.6m)をメインに6点の作品を鑑賞し、そこから何を讀

み取れるか意見交換した。体育館にスケールの大きな作品が展示され、それぞれの作品が、“福島から避難する母子”か“福島にとどまることにした母子”を導入に、作家の思い、「ふくしま」「人権」「いのち」「人生」などについて、深く多様な視点から考えられた。また、表現することの大切さにも気づけた。



### ★いのちを育む授業（おもに2016年9月末～10月初旬）

於 旭東中・柔道剣場ほか 第3学年約320名対象

9/29・30 事前授業として、地域の方々を講師に出産・育児にかかわる教材ビデオ視聴、赤ちゃん抱っここの仕方講座などを実施した。また、10/5～7には実際に赤ちゃんやお母さん方との交流授業を実施した。岡山市保健所・おやこクラブ・愛育委員さんなど多様な機関と連携した。さらに11/4には講演会（東森二三子氏 NPO・助産院ミントハウス）および事後研修をおこなった。



### ★特別展示(2017年1月20日～1月31日)

於 旭東中・中棟2階廊下 全校約911名および教職員・一般市民100名。

年末年始の現地活動について公開展示。あらためて現状を知る機会に。生徒・教職員にくわえ、保護者の皆さん、関係者、地域の方々など多くの方々に来られた。山陽マルナカ本店さまの福島県双葉郡浪江町支援の連携協働することとなり、本校学区の同店舗内で特設展示をすることへと発展した（2月初旬から下旬まで）。



## 2. ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ

社会問題を取り上げることで、生徒たちに多面的総合的に考える力、批判的に物事をみる力がつくようにした。また、本取り組みを通して生徒が、社会のさまざまなものの関連性に気づけるよう、学習事項のつながり、関係機関のつながりなどを明示的にワークシートで示したり、日頃の学校生活に照らし合わせて考えさせたりした。

さらに、いずれの取り組みでも質疑応答や参加型ワークショップ、対話型講演会など、生徒の参加意識が高まるよう工夫した。これにより身近な友人の大切さや多様な意見、参加・表現することの意義にあらためて気づけた生徒もいた。



### 3. 取組の成果（参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など）

当初、生活指導面で課題が多かったが、本プログラムの授業実施により、生徒は広い視野や自己への肯定感を得られ、全体的にも個人的にも落ち着きが増したと思われる。生徒の中に、「今日の前のことを大切にしよう」「一度きりの人生・一回きりのいのちを大切にしよう」という意識が浸透していったと感じている。あわせて、生徒の中から有志やボランティアによる活動・行事への参加が増加した。（例）国際交流事業、卒業式準備活動、奉仕活動など

さらに、地域の方々に学校と NPO が連携協働した取り組みを伝えることで、中学校や中学生への肯定的評価が高まったように思う。このことは地域コミュニティにおける ESD 推進にもつながることが期待される。

### 4. 今後の課題と展望

生徒はいのちや生き方について、多面的総合的に考えられた。これは実施学年が第 3 学年で進路選択の時期と重なっていたことがよかったと思われる。一方、1・2 年で実施することで、より早くから中学生が日々を主体的・未来志向的に送られるのではないかと期待もできる。

今後は継続的な活動となるよう、より多くの教職員や関係者が計画・提案の段階にかかわるよう工夫する必要がある。また、本事業がひとつのきっかけとなり、職員研修において本校に元来ある部活動や職場体験、地域フィールドワークなどを ESD の視点で見直し、改善していくことを確認できた。来年度は校内研修・研究の分掌を中心に、学校、学区の企業（小売店）、NPO、高等学校などが連携協働することで、既存の取り組みとあわせて ESD の視点で改善していくことが期待できる。